

熱帯の有用材 (27)

緒 方 健

マンソニア (Mansonia) 学名: *Mansonia altissima* (A. Chev.)

A. Chev. (アオギリ科)

マンソニアはリベリア東部からコートディヴォアール、ガーナ、ナイジェリア、カメルーン東南部にかけての熱帯西アフリカに分布する樹木で、やや乾燥した、落葉性の低地熱帯降雨林に生育する。木材の取引名としては、英語圏では属の学名のままマンソニアが、またフランス語圏ではアフリカの現地名からきたベテ (Bété) がよく用いられる。そのほか、Bodua (コートディヴォアール)、Aporono (ガーナ)、Afon, Ofun, Odo または Urodo (ナイジェリア) などの名称がある。心材色が北米のブラックウォールナット (*Juglans nigra* L., クルミ科) とやや似ているところから、African Black Walnut とも呼ばれることがある。しかし、もちろん分類学的な類縁関係はうすい。なお、*Mansonia* 属は5種からなり、アフリカのほかにインド東部のアッサム地方からビルマに隔離分布している。学名の *Mansonia* はインドの山林局の行政官であった F.B. MANSON に因んで名付けられた。

樹木の形状: 樹高 30~40 m, 直径 50~80 (〜130) cm になる高木で、枝下高 15~25 m の通直、円筒状の樹幹をもち、下部に鈍い板根がある。葉は乾季に一時落葉する。樹皮は淡褐灰色で、浅くたてに割れる。樹皮の切口は褐色の筋のある淡黄白色で、やがて濃褐色になる。葉は長さ 15~30 cm, 幅 7~23 cm の楕円形で、縁には低く疎らな鋸歯があって波うち、基部は心脚。葉裏には星状毛があるが、ほとんど無毛のこともある。葉柄は長さ 1.5~6 cm。花序は長さ 8~15 cm の散房状円錐花序で、花梗には星状毛がある。花は径約 1 cm, 白色で芳香がある。果実は翼果で、翼の長さは 3.5~5.5 cm。

木材の特徴: 辺材は幅約 5 cm, 灰白色~淡黄白色。心材は褐色からときには紫黒色を示し、個体による色の変化がかなりみられる。しばしば赤色、紫色または灰緑色の色調を帯び、またあいまいな暗色の縞が現れることがあり、これがブラックウォールナットに擬せられる所以でもある。新鮮時には色が鮮やかだが、時とともに、とくに日光にさらされるとぼんやりした色に褪せてくる。光沢はあまりない。木理は通直、肌目の精粗は中庸~やや精。気乾比重 0.6~0.7 で重さ中庸。

顕微鏡的な特徴としては、道管は孤立するものと半径方向に 2~3 (〜8) 個複合するものからなり、後者の割合が高い。分布数は 7~30/mm²。孤立管孔の最大径は 120~140 μm。道管の穿孔は単穿孔。道管相互壁孔は交互壁孔で、径 3 μm。道管放射組織間壁孔は道管相互壁孔に似る。放射組織は異性 II~III 型で両端に 1~3 個の直立細胞がある。多く

OGATA, Ken: Useful Timbers in the Tropics (27) *Mansonia*

農林水産省森林総合研究所東北支所

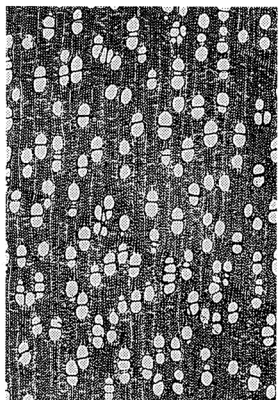


写真-1 *M. altissima* 木口面
(16×)

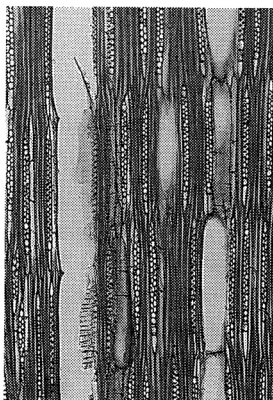


写真-2 同左 板目面
(40×)

は2～3列または3～4列で、単列はほとんどない。高さ300～400 μ m程度のきれいな層階状配列をなし、そのため縦断面で注意すると細かいリップルマークが現れる。軸方向柔組織は1～2細胞のターミナル柔組織と放射組織間に細かく分布する短接線状柔組織からなる。放射組織以外の軸方向要素、すなわち道管、軸方向柔組織、繊維も層

階状配列をなす。放射組織の主として直立細胞に結晶が存在する。シリカは含まない。

木材の加工性としては、乾燥は比較的速く、狂いは少ない。乾燥後の寸法安定性は中庸。強度は比重相当で、ブラックウォールナットにほぼ匹敵するが、やや硬く、曲げ強度も大きい。心材は菌、昆虫に犯されにくい。切削加工性、釘打ち性、接着性、塗装性も良好で、あまり問題がない。ただ、加工時の木粉には目、鼻、喉などの粘膜を刺激する物質が含まれるので、木粉除去装置とマスクの装着が必要である。

マンソニアは加工性などにも欠点が少なく、ブラックウォールナットに似た落ち着いた、雅致のある色調から銘木の一種として家具など装飾用材、屋内造作材などに用いられ、わが国にも輸入されている。色が褪せてくるのが若干問題である。

マンソニアの生育する熱帯西アフリカの落葉樹林地帯でよくみられる樹種として、同じアオギリ科のコティベ (*Kotibé* : *Nesogordonia papaverifera* (A.Chev.) R. Capuron : Syn. : *Cistanthera papaverifera* A. Chev.) がある。分布域はマンソニアより広く、シエラレオネからガボンにまでみられ、主産地はコートディヴォアール、ガーナ、カメルーンである。樹高35～45m、直径90～120cmに達する高木で、しばしば高さ3mほどの鋭い板根をもつ。

コティベは心材が赤褐色で、一般に木理は著しく交錯し、外観的にリボン杻を現わす。気乾比重約0.75。顕微鏡的にはコティベはマンソニアに似ているところが多いが、木理の交錯が著しいこと、比重が高いこと、道管径が小さいこと、放射組織が同性に近いことなどが区別点となる。コティベはなかなかの良材で、色調や交錯木理はセンダン科のマホガニー (*Swietenia* 属、とりわけ *S. mahagoni* Jacq.) やアカテツ科のマコレ (前回記載) を想わせるところがある。マホガニーに比べると、道管径が小さく、硬い感じがする。家具、フローリング、造作などに適した材であるが、知名度が低く、わが国にもほとんど輸入されていないと思われる。